

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 9 日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23530900

研究課題名(和文) 解離における自伝的記憶の認知特性

研究課題名(英文) Structural characteristics of the autobiographical memory of the individual having dissociative experiences

研究代表者

堀内 孝 (HORIUCHI, Takashi)

岡山大学・社会文化科学研究科・准教授

研究者番号：00333162

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円、(間接経費) 390,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、解離性体験者の自伝的記憶の構造的特徴を、自己-記憶システムの観点から検討することである。相関分析の結果、解離性体験は自己明確性とは負の相関を、ネガティブ領域の自己複雑性とは正の相関をそれぞれ示した。しかしながら、重回帰分析の結果、解離性体験に有意に影響を与えるのは自己明確性のみであることが明らかになった。以上の結果は、解離性体験者の自伝的記憶は主にエピソード記憶の統合度の低さに特徴づけられることを示唆している。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to examine structural characteristics of the autobiographical memory of the individual having dissociative experiences from the viewpoint of Self-Memory System. Correlational analysis showed that dissociative experience correlated negatively with self-concept clarity and positively with negative self-complexity. However, multiple regression analysis revealed that only self-concept clarity significantly predicted dissociative experience. These results suggest that the autobiographical memory of the individual having dissociative experiences is characterized primarily by lower degree of integration of episodic memory system.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：解離 自伝的記憶 自己明確性 自己複雑性 統合度

1. 研究開始当初の背景

(1)現代社会における解離

解離(dissociation)は現代社会を象徴する病理である。現代人の精神病理や社会現象には解離が広く関わっていると言われている。そして、当事者たちは、しばしば、そのような強い情動を伴った体験を思い出せないと報告する。

DSM-IV-TRによると、解離性障害は「意識、記憶、同一性、または知覚についての通常はよく統合されている機能の破綻」と定義され、解離性健忘、解離性トン走、解離性同一性障害、離人性障害、特定不能の解離性障害、に分類される。解離概念に関しては、ICD-10 が離人を別の障害として分類しているように、研究者間で十分なコンセンサスが得られているとは言い難いのが実状である。また、解離性同一性障害のように明らかに病的な水準と、健常者でも日常的にみられる没入を一連の連続体と見なし得るのかについても議論が分かれている。しかしながら、解離の中心の特徴が、自分自身に関する記憶の障害にあることに関しては、研究者の意見は概ね一致している。

解離を機能性の記憶障害とみなせば、解離の研究はまずと記憶研究を志向することになる。しかしながら、解離が関係するのはテスト勉強のような記憶ではなく、自分自身の経験に関する記憶、すなわち、自伝的記憶である。自伝的記憶には膨大な過去経験の情報が含まれており、その内容も個人によって著しく異なる。自伝的記憶は、主に認知心理学の記憶領域で研究が行われてきたが、その複雑さ故に、自伝的記憶を体系的に説明する理論が提唱されるのは、最近になってからのことである。

(2)自己 記憶モデル

Conway(2005)は、自身の自伝的記憶の研究で得られた成果を基盤に、自己-記憶システム(Self-Memory System)という自伝的記憶のモデルを提唱している(図1)。自己-記憶システムでは、作動自己(working self)と自伝的記憶知識ベース(autobiographical memory knowledge base)という独立した二つのコンポーネントが仮定される。

作動自己 作動自己は、作動記憶(working memory)の機能を拡張したもので、活性化した自分自身の目標(self-goal)と関連する概念的自己(conceptual self)から成り立っている。作動自己は新たな情報の符号化や、長期記憶に保存された知識のアクセスビリティ、自伝的記憶の構成といったプロセスに関与し、システムの一貫性が維持されるように調整を行うとされる。

自伝的記憶知識ベース 自伝的記憶知識ベースは長期記憶に保存されており、概念化された自伝的知識(autobiographical knowledge)とエピソード記憶という異なる情報を含んでいる。自伝的知識は、ライフストーリー(life story)から一般的出来事

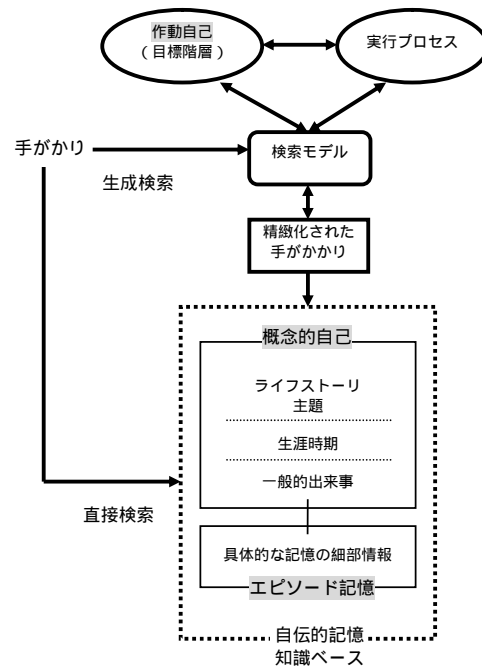


図1 自己 記憶システム (Conway, 2005 より作図)

(general event)まで、抽象度の異なる情報が階層構造をなして保存されている。エピソード記憶には、ある経験にまつわる感覚や知覚、概念そして感情といった細部にわたる情報が含まれている。

自伝的記憶の検索 自伝的記憶の構成は、自伝的記憶知識ベースと作動自己が連動して機能することによって実現する。作動自己の制御プロセスは、構成された内容が自伝的記憶であるか否かの判断に関わっている。自伝的記憶を検索する経路には、生成検索(generative retrieval)と直接検索(direct retrieval)がある。自己知識と記憶システムによるダイナミックな想起活動が行われ、目標階層や自伝的知識が十分に統合された結果、回想意識を伴う自伝的記憶が構成される。

(3)自己-記憶システムに準拠した解離研究の有効性

自己-記憶システムの優位性は、多くの実証知見を体系的に統合したことにより、それ故、多種多様な自己研究に対する高い適用可能性を有している。本申請の予備研究として堀内(2010)は、解離と自伝的記憶を想起する際の意識との関係について検討を行った。堀内・林(2008)で使用された独立 IRK (Independence/Remember-Know) 手続を適用し、自伝想起における意識的成分と自動的成分を分離した結果、解離傾向の高い人は、否定的な自伝的記憶を自動的に想起する傾向が認められた。

2. 研究の目的

解離(dissociation)は、意識、記憶、同一性、または知覚といった心的機能の破綻であるが、その主特徴は自分自身に関する記憶、すなわち、自伝的記憶(autobiographical memory)の障害にある。本研究は、自伝的記

憶の代表的なモデルである Conway(2005)の自己-記憶システム(Self-Memory System)に準拠し、その構成要素である自伝的記憶知識ベース(概念的自己, エピソード記憶)の観点から、解離の認知特性を検討すると同時に、治療に対する新たな糸口を探ることを目的とする。具体的には、本研究では、自己明確性(Campbell, 1990; Campbell, Trapnell, Heine, Katz, Levallee, & Lehman, 1996)と自己複雑性(Linville, 1985)という二つの指標に注目する。自己明確性とは自己知識が互いに矛盾なく安定した構造になっている程度を表し、いわゆる概念の統合度を表す指標と考えられる。一方、自己複雑性とは、自己知識が複雑で多面的な構造を形成している程度を表し、いわゆる概念の分化度を表す指標と考えられる。自己知識の構造化の程度や在り様は、個人の特性や価値観、心的状態を反映していると考えられる。本研究では、解離性体験を有する解離傾向者における自己知識の構造的特徴を、自己明確性(統合度)と自己複雑性(分化度)という観点から検討する。

3. 研究の方法

研究目的を達成するため、3年にわたる研究計画を立案した。最初の2年間(平成23年度, 24年度)は、まず、自己明確性と自己複雑性が解離に及ぼす影響についての研究を行う。次に、影響を受けている自伝的記憶が、意味記憶システムにおける自己知識なのか、エピソード記憶システムにおける自己知識なのかを同定するための研究を複数実施する。最終年度である平成25年度は、得られた研究成果を総合的にまとめ、報告書を作成する。学会発表、論文投稿は成果が得られた段階で随時行っていく。

4. 研究成果

研究1では、分化度の指標として自己複雑性(Linville, 1985)、統合度の指標として自己明確性(Campbell et al., 1996)を採用した。相関分析の結果、解離性体験尺度と自己明確性尺度の間に-.36、解離とネガティブ領域の自己複雑性との間に.17の相関係数が得られた。しかしながら、自己明確性とネガティブ領域の自己複雑性の間にも-.18の相関係数が得られた。そこで、解離を従属変数、自己明確性とネガティブ領域の自己複雑性を独立変数とする重回帰分析を行ったところ、自己明確性にのみ有意な標準偏回帰係数が得られた(-.34)。以上の結果は、解離傾向者の自己知識は主に統合度の低さに特徴づけられることを示唆するものである。

ところで、自己明確性尺度はエピソード記憶システムの自己知識だけでなく、意味記憶システムにおける自己知識の明確性も測定している可能性が指摘される。研究2では、(Campbell, 1990)の手続きに従い、自己概念の極端さと確信度が解離に及ぼす影響を

検討した。分析の結果、解離の下位因子である健忘と確信度に-.19の相関が認められたのみであった。研究3では、ポジティブ語とネガティブ語に対して自分自身にあてはまる程度(適合度)と確信度の評定を求めた。そして、解離傾向との相関係数を求めた結果、ネガティブ語の適合度と解離傾向に弱い相関が認められたのみであった。研究4では、双極性の形容詞対を単極にばらし、対極の適合度評定の矛盾度を測定した。そして、解離傾向との相関係数を求めた結果、矛盾度と解離傾向の間に有意な相関は認められなかった。以上の結果は、解離傾向者の自己知識の統合度(自己明確性)の低さは、エピソード記憶システムの自己知識の明確性の低さに起因することを示唆するものである。

解離の原因として心的外傷や強度のストレスが指摘されているが、そのようなネガティブで強い情動状態に長期間さらされることによって、一般的には、否定的な自己知識が構造化され、その構造は複雑かつ明瞭になる、と推察される。これはうつ病に特徴的な自己知識の構造である。しかしながら、解離性体験を有する解離傾向者の自己概念の明確性はむしろ全体的に低いことが本研究の結果から明らかとなった。解離傾向の高い者は防衛機制のひとつとして自己知識の統合度を低くすることにより、うつ病などの重篤な精神的不適応を回避している可能性が指摘される。

なお、本研究の調査対象者は、大学の講義に出席している大学生であった。したがって、本研究の結果が、病的水準にある解離に対しても一般化できるかは定かでない。解離性障害の人たちを対象にした検討を行うことが今後の課題として指摘されるであろう。

以上の成果は、トラウマティック・ストレス学会で発表すると同時に研究雑誌に投稿し、現在、審査中の状態にある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計1件)

堀内 孝、解離傾向における自己知識の構造的特徴、第11回日本トラウマティック・ストレス学会発表論文集、2012

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

堀内 孝 (HORIUCHI, Takashi)
岡山大学・大学院社会文化科学研究科・准
教授

研究者番号：00333162

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：